

植物による搾取

筑波大学教授
サイエンスライター
渡辺 政隆

人類の進化にとって火の使用が重要だったことは疑いない。火をコントロールできるようになったことで、狩りで仕留めた獲物の肉を焼いたり、暖をとったり、疎林を焼き払い植物を芽吹かせることで獲物となる動物を呼び寄せたりなどといったことが自在にできるようになったはずなのだ。

火の使用は、古くは80万年ほど前にさかのぼる。直立原人ホモ・エレクトゥスに近いハイデルベルク人（ホモ・ハイデルベルゲンシス。またエレクトゥスの亜種ホモ・エレクトゥス・ハイデルベルゲンシスとする考えもある）の遺跡から、たき火跡が見つまっているのだ。自然発火した火を燃やし続け、暖をとったり肉を焼いたりしていたのだろうか。

イスラエル北東部、ヨルダン渓谷北部にある旧石器時代のベノートヤーコフ遺跡からは、78万年前のたき火跡が見つまっている。2016年12月に発表された最新の研究成果によれば、その遺跡から55種類以上の食用可能な植物の遺物が見つかったという。それらの遺物が見つかった場所は、自然現象による堆積層とは明らかに異なる堆積物であることから、人類によってその場所に運ばれて堆積したものと判断できるといえる。動物の遺物や石器などもいっしょに見つまっている。見つかった木の実、果実、種子、葉や茎、根菜などのなかには、現在の同地域からは見つからない種類10種も含まれていた。当時はそこに湖があったと考えられており、ヒシの実など食用可能なもの7種が確認されている。78万年前のその地域は、現在よりも植生豊かなエデンの園だったのかもしれない。アフリカを出た人類は、その地域を通過してヨーロッパに広がっていったのだろうか。

見つかった異物のなかには、火で焼いた痕跡を残すものもあるようだ。加熱処理することによるあく抜きなどで、生では食べられないものを食用にしていた可能性もある。今回の調査では、植物繊維や薬、魚毒、道具製作に用いられた可能性のある植物種は調べていない。そこまで調査を広げれば、原人が自然環境を活用していた詳細がさらに明らかになりそうだ。

植物や肉をそのまま火にかざしても、熱処理ができる。し

かし、木の実や種子、根菜などを煮て調理するには容器が必要である。見つかっている最古の土器は1万5000年ほど前のものとされている。ネアンデルタール人は2万年ほど前に絶滅しているのだから、その作者は現人であるホモ・サピエンス（クロマニオン人）ということになる。そうした土器による調理の痕跡は、これまでも確認されていた。しかしそれらはみな、動物性食物の調理に使われていた痕跡だった。植物系食物の調理については、これまでなぜか確認されていなかったのだ。

それについても2016年の12月、新たな展開があった。北アフリカでなされた注目すべき発見が報告されたのだ。人類は1万年前に、野生植物を火にかけた土器で調理して食べていた記録が確認されたというのだ。リビアの砂漠で発掘された素焼き土器の内面に残っていたオイル成分を分析した結果、穀類や陸上植物の葉など、さまざまな植物成分が確認された。珍しいところでは水生植物も調理されていたようだ。サハラ砂漠のそのあたりも1万年前は緑豊かな水辺のオアシスだったのだろう。当時の人類はまだ、狩猟採集生活をしていて、野生の植物を調理することで、食生活の幅は、栄養面も含めて、格段に広がったはずである。

狩猟採集生活という、女たちが集めた植物と男たちが持ち帰った肉をみんなで分け合って食べるというイメージが浮かびがちである。しかしアフリカやアマゾンなどで狩猟採集生活をしている部族の研究によれば、狩りの獲物はしとめたその場で食べられることが多く、主食は採集した植物性のものだという。過去においてもそうだったと思われる。採集した植物の調理は、人類の生活に革命をもたらしたのではないか。そしてそうした生活はのんびりしていて存外幸福なものだったはずである。人類の系統は、250万年もそうやって生活していたのだ。

中近東の肥沃な三日月地帯で農耕が開始されたのは1万年ほど前のこととされている。一般にはそれによって文明が発祥したとされている。たしかにそうなのだろう。しかしその文明は、社会を複雑にし、貧富の差をもたらした、あくせくと

働かねばならない制度をもたらした。宗教もその一貫として生まれた。以来、人類は小麦や米、トウモロコシなどの品種改良に精を出し、収穫量の増産に努めてきた。今話題の本『サピエンス全史』の著者ハラリは、それは誰にとっての幸せだったのかと問う。それは、たとえば小麦の繁殖戦略だったのではないかと。

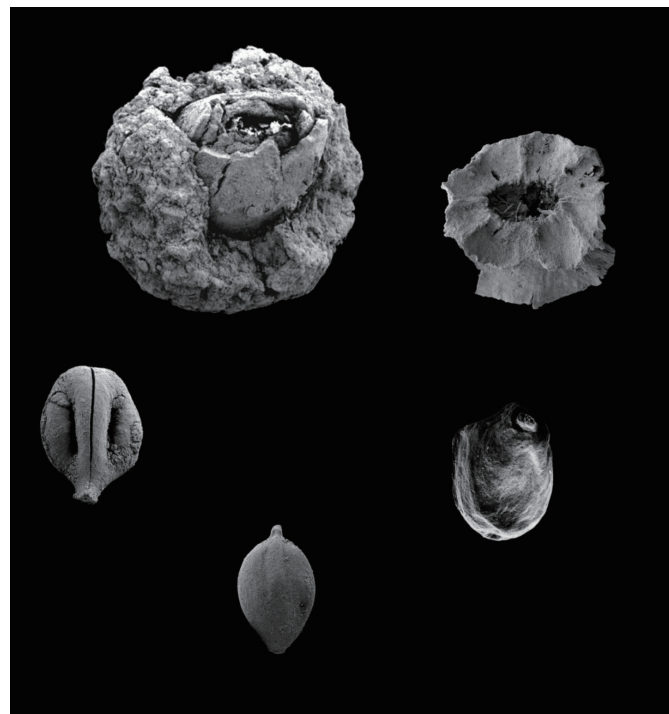
1万年前、小麦は中東の荒地に生える野草にすぎなかった。それが今は、小麦の作付面積は225万平方キロに及んでいるという。日本の面積のおよそ6倍にあたる面積だ。ふつうは、ヒトは小麦を栽培化したという言い方がされる。しかしほんとうにそうなのだろうか。われわれは小麦に家畜



化されたのだと、ハラリは言い切る。この逆転の発想には一理ある。

小麦や米を主食にすることで、ヒトは肥満を手に入れた。炭水化物に含まれる糖質は、体内で脂肪に変わり、運動によって燃やさないかぎり体内に蓄積していく。ヒトは肉を食べるから太るとは限らない。糖質を取り込むことでも太るのだ。なんということだ。いやもちろん、バランスのよい食事と適度な運動を心がければ問題はない。だが、食べるために運動するというのも、なんだか本末転倒ではないか。

しかし、すべては今さらの話なのである。



ベノトヤーコフ遺跡(左)とそこから見つかった78万年前の食用にされた果実と種子(右)(写真はヘブライ大学提供)